

この世に対する神の愛 ヨハネによる福音書 3:11-21

1. 「あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」 (3:12-15)
 - a. イエスはしばしば日常のシチュエーションを使って天の御国の真理の解き明かしをされる。その理由は天の御国は現在は見えない世界であること、また今私たちが生きている世界はこれから来るものの陰にすぎないからである。
 - b. 13 節でイエスはご自身がどのようなお方であるか、そしてご自身と神と天の御国との関係をほのめかしている。イエスはご自身がそこから来られ、また昇られた（ギリシャ語では昇り続けているという進行形）まだ見ぬ世界との超自然的な関係をお持ちである。
 - c. この神との関係により、イエスは上げられ世の罪をご自身の体に負い、それがモーセが上げた青銅の蛇に見られた救いの予表となっている。
2. 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。 (3:16)
 - a. イエスは私たちのため罪（青銅の蛇）となってくださったので、彼を見上げ信じる者は滅びず永遠のいのちを持つ。
 - b. 現在私たちは滅びに至っており、この世はいやしを求めている。
 - c. 滅びの解決法は永遠のいのちである。それは私たちが神様に何かをささげることによって得られるものではない。永遠のいのちはただ神様の驚くべき愛によってのみ与えられるのである。
3. 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。 (3:17-18)
 - a. ほとんどのクリスチャンはヨハネ 3:16 を暗唱できる。しかしこの世にとっては 17 節も同じように知られたほうが良いだろう。私たちに与えられた永遠のいのちというギフトを他人をさばくための道具にしてはならない。
 - b. 信仰により恵みにより救われたクリスチャンは、自己義認の態度をとり他の人より優っているかのようにふるまわないよう気を付けなければならない。
 - c. イエスは罪人をとがめるためではなくご自身が罪に定められることにより彼らが救われるために来てくださった。しかしそれは神様が罪を大目に見るということではない。私たちは愛に欠け、他人をさばく人になりやすいが、と同時に罪を見逃して容赦するというのも間違いである。どちらも行き過ぎは神の愛と恵みの間違った表現である。
4. そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。 (3:10-21)
 - a. キリスト教界全体で最も顕著なテーマ～愛と光～はこの聖句に表されている。これについてはこの福音書の中でさらに発展していくが、光とやみとは単に照明と暗闇のことではない。光とは神聖なる神からの啓示、そしてやみとは神に敵対するものから出るねじ曲げられた啓示である。
 - b. 愛は信じる者とともにある。アガパオー（愛する）とは絶え間なく主が望むことを主とともに（その力と導きによって）行うこと。真のアガパオー（愛がある）とは神のご性質である。